

山崎定作氏は、近づきながらも距離を保って
まいて行く。彼とツルの間には、一種独特の、
確かな信頼感といったものがあるように見える。

タンチョウ保護の歴史は明治時代にさかのぼ
るが、こんにちのような給餌や生息調査が始まっ
たのは昭和27年2月。猛吹雪の中でえさをさが
している群れを見つけた阿寒町の人々が、人工
給餌に成功してからである。その年の調査では
33羽だった。が、30年後の昨年末には300羽を
こえた。明治の乱獲で絶滅の危機にさらされた
タンチョウは、北海道でよみがえったのである。

山崎定作氏(阿寒町)
「ツルとは、おやじの代から
家族ぐるみのつき合いでね。
観察センターの管理もあるし、
見学の日には700人もあるしで
カゼを引くヒツもないさ。
ツルがいる冬の間、こうして
《鶴のおばさん》と会うのも
めったにないことだよなあ」



タンチョウを したくない。 幻に

この30年間は、けっして感傷や愛惜だけで歩
んだ道ではない。収穫を分け与えてきた人々が
いた。給餌を続けた人々がいた。密猟、果荒し、
無謀なカメラマンの侵入を防いだ人々がいた。
そと産卵や子育てを観察してきた人々もいた。
保護行政に心をくだいた人々もいた。美しい姿
に魅せられて保護思想の啓蒙に力を注いだ人
々もいた。亡きひとの志を継いだ人々もいた。
そんな人々を、かげで支えたひとびとがいた。
いま、タンチョウは生息地の湿原に帰り、繁殖を
はじめている。渡部トメ氏も山崎定作氏も、ほか
の給餌や監視にあたる人がそうであるように、餌
場だった土地をたがやし、再びツルが来るまで
の農作業にいそがしい。この冬は何羽になっ
ているか、期待と同時にやはり不安もあるという。



ヒトの心に「トリの保護区」を

財団法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この愛鳥キャンペーン広告は、日本鳥類保護連盟の指導ならびに
日本野鳥の会、自然保護団体の有志の方の協力により、サントリー株
式会社が愛鳥週間特集として制作したもので、野鳥保護を通じて
環境と自然を守ることの大切さを訴え、美しい地球を未来へ引きつう
と、さまざまなアングルで展開してまいります。どうぞご支援を――。

日本産の鳥類の中でも最大級のタンチョウが
北海道にだけ生き残ることができたのは、平らで広大な
網走湿原があったからとされている。
最大巾は東西17km、南北36km、面積約3万ha。
タンチョウの産卵はふつう2個。
生まれたばかりのひなは身長13cm、体重130gほどだが、
成鳥は翼をひろげると2m、身長140cm、体重は15kgにもなる。
特別天然記念物・特殊鳥類・北海道の鳥

